

MLC220 ドイツ文学

2年 3,4クォーター

担当教員 磯崎 康太郎

授業形態 講義

単位数 2

曜日・時限 木曜日・2時限

授業概要

近現代のドイツ語圏の文学を、通史的に講義する。とりわけゲーテ時代に焦点をあて、ゲーテ、グリム兄弟、アイヒェンドルフ、E. T. A. ホフマン、シュティフター等を扱った後、そこから現代に至る流れとして、ハウプトマン、ホーフマンスタール、カフカ等の作家を取りあげていく。講義内容として、疾風怒濤、古典主義、ロマン主義、リアリズム、自然主義、世紀末芸術といった様式概念とその相互関係を確認しながら、具体的にこの作家たちの文学テクストを読解していく。テクストの読解に際しては、受講生自身の読書体験と主体的な解釈を重要視しながら、こちらでも最新の研究成果を紹介することに努める。とりわけ近年の文化研究の立場からの解釈は、ドイツ文学やヨーロッパの文化史を新しい現代的な視点で眺めることにもつながり、テクストを通じた思考のトレーニングとなるはずである。またそうした新しい立場からの作品解釈を示すものとして、文学の映像化も看過できない意義を持っている。ゲーテやシュティフターの作品、およびグリム童話等の映像資料も講義のなかで取りあげることによって、18世紀末から20世紀初頭までのドイツ文学が、現代の日本に生きるわれわれにとっていかなる意義をもつのかという点を考察する。

到達目標

学生は、

- (1) ドイツ文学を通じて、ヨーロッパ文化の一つの中核であるドイツ語圏の文化について理解を深める。
- (2) 18世紀末から20世紀初頭のドイツ文学が、現代社会のなかでもつ意義について考察する。
- (3) 文学テクストと先行研究との関連性について分析する。
- (4) 映像資料や美術作品等の文学以外の芸術により、文学を深く理解することを目指しながらも、表現形式やメディアが異なることから生じる相違点について学ぶ。
- (5) 各自が発表に責任を持ち、積極的に協働的な学びを経験する。

期待される効果

- ・近年の文学研究の動向を知り、テクストを解釈するという行為に精通する。
- ・人文科学の学問がもつ複眼的かつ批判的思考を身につける。
- ・現代日本の日常生活では接点の少ないドイツ文学の世界を探索することにより、豊かな国際的教養を身につける。

先修科目

必修としては設定しないが、ドイツ語とその関連科目を履修しておくことが望ましい。

教科書・参考資料等

配布資料を主たる教材とするため、教科書はとくに指定しない予定である。参考書は、以下のものを指定するが、個別作品の参考文献については随時紹介する。

- (a) 保坂一夫編『ドイツ文学——名作と主人公』 自由国民社 2009年
- (b) 手塚富雄・神品芳夫『増補ドイツ文学案内』 岩波書店 1963年
- (c) ハインツ・シュラッファー『ドイツ文学の短い歴史』 同学社 2008年
- (d) Kurt Rothmann, *Kleine Geschichte der deutschen Literatur*, Stuttgart (Philipp Reclam) 1978.
- (e) *Duden. Basiswissen. Schule. Literatur*, Detlef Langermann (Hg.), Berlin (DUDEN PAETEC) 2006.

授業の方法

この授業は講義形式を基本とするが、部分的には演習形式も取り入れる。担当教員は講義を行い、定期的に読書課題を与える。読書課題の内容について、受講生は個人またはグループで発表を行い、その質疑応答には他の受講生も積極的に参加することが求められる。また受講生は、毎回の授業時にリアクションペーパーをまとめ、学期末には最終レポートを仕上げる。

成績評価

リアクションペーパー

各回の授業の最後に記入の時間を与え、受講生が授業を振り返り、授業の内容とそれについての意見、質問、要望などをまとめる

発表資料

読書課題は全員が取り組むものだが、受講生はそれについての発表を学期中に最低一回は行う。その際に、受講生は作家の紹介や作品のあらすじ、作品についての研究状況および自分の意見や解釈を記した、発表資料を事前に用意する。

学期末レポート

授業で扱ったドイツ文学作品について、その作品の先行研究を調べたうえで、自らの解釈をまとめあげる。レポートのテーマは、受講生の関心に応じて各自で設定してもらうが、講義内容や受講生による発表内容を踏まえることが求められる。

成績

30%	リアクションペーパー
20%	発表資料
50%	学期末レポート

授業スケジュール

第1回:

ガイダンス、配布資料によるドイツ文学史概説：ゲーテ時代に至るまで、授業で取り扱う文学作品の紹介と受講生による発表課題の選択

第2回:

ppt 資料によるゲーテ時代の概観、疾風怒濤とゲーテ『若きウェルテルの悩み』についての導入講義、同作品の受講生による発表

第3回:

ppt 資料による疾風怒濤とゲーテ『若きウェルテルの悩み』の講義（まとめ）、同作品の映像資料とその意義

第4回:

ppt 資料による初期ロマン主義とグリム童話についての導入講義、同作品の受講生による発表、同作品の講義（まとめ）、同作品の映像資料とその意義

第5回:

ppt 資料による後期ロマン主義とアイヒェンドルフ『大理石像』についての導入講義、同作品の受講生による発表、同作品の講義（まとめ）とロマン主義美術（C.D. フリードリヒ等）についての考察

第6回:

ppt 資料によるドイツの怪奇小説と E. T. A. ホフマン『砂男』についての導入講義、同作品の受講生による発表、同作品の講義（まとめ）、フロイト『不気味なもの』の読解と精神分析的解釈についての考察

第7回:

ppt 資料によるドイツ語圏のビーダーマイヤー時代とシュティフター『水晶』についての導入講義、同作品の受講生による発表、同作品の講義（まとめ）、同作品の映像資料とその意義

第8回:

前半のまとめ：講義と学生によるディスカッション、ppt 資料による 19 世紀後半のリアリズムと自然主義の概観

第9回:

ppt 資料による自然主義とハウプトマン『踏切番のティール』についての導入講義、同作品の受講生による発表、同作品の講義（まとめ）と自然科学の社会的影響力についての考察

第10回:

ppt 資料によるウィーン世紀末芸術（クリムト、O. ワーグナー等）とその社会的文化的背景についての概観、世紀末芸術をめぐる映像資料とその意義

第11回:

ppt 資料による集合的無意識とホーフマンスタール『バッソソニエール元帥の体験』についての導入講義、同作品の受講生による発表、同作品の講義（まとめ）とフロイト、ユングの精神分析学的概念についての考察

第12回:

ppt 資料による言語危機とホーフマンスタール『チャンドス卿の手紙』についての導入講義、同作品の受講生による発表、同作品の講義（まとめ）

第13回:

ppt 資料によるプラハの世紀末とカフカ『変身』についての導入講義、同作品の受講生による発表、同作品の講義（まとめ）

第14回:

ppt 資料による大衆芸術とカフカ『断食芸人』についての導入講義、同作品の受講生による発表、同作品の講義（まとめ）、カフカ『掟の前で』の読解と解釈の多様性についての考察

第15回:

全体のまとめ：講義と受講生によるディスカッション、ドイツ文学の現代的意義についての考察

事前・事後学習

- ① 講義各回に取り上げる文学作品を事前に一読すること。対応する参考図書の項目を一読すること（予習）。
- ② 講義聴講の後に、講義された内容・配布資料と共に対応する教科書・参考資料等の項目について理解を深めること（復習）。